

あゆみ通信

VOL. 142

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

12/13(日) 総会にご参集ください

会員の皆さん、寒い時節となりましたが、折からのコロナ禍と重なり、体調不安のこの頃ですが、お変わりありませんか。

今年は1月にお寺の仏事を終えてさあ、これからという時にコロナウイルス感染拡大騒ぎで日本中が震撼し、以後、ごく最近まで、大事な聞法会などの仏事がほとんどキャンセルとなり、真宗本廟をはじめ大阪別院や各寺院の多くでは、ご住職方だけの内勤めが行われていました。最近になって、やっと、第2組でも、万全の対策をして、ソーシャルディスタンスを守り、消毒や換気をして、最初で最後の聞法会が開催できました。

そして、「真宗は報恩講に始まり、報恩講で終わる」とされる報恩講が、難波別院では10月25日(日)～28日(水)まで、そして第2組では11月12日(木)午後2時から即應寺において開催され、真宗本廟では11月21日(土)～28日(土)まで執行されます。あゆみの会では3月に予定していた門徒会との合同研修会を延期して、6月29日(月)午後1時30分から、光照寺(墨林浩組長)をお借りして、澤田秀丸先生を講師にお招きして、40名が参加して、聞法をたのしみしました。しかし、第2回例会を兼ねた第2組のバスツアーは中止となり、また、第3回例会の第2組青年組織・朋友会との合同研修会も中止のやむなきに至りました。

まだ、適当なコロナウイルス対策のワクチンもできない中で、来年もこの状態が続くと思われます。

そんな中ですが、この環境

に負けて、逼塞して、仏弟子としての聞法活動を停止することはできません。どんな状況の中でも、仏法の学びは絶やせません。

思えばあゆみの会は、2011年の宗祖親鸞聖人750回忌法要を迎えるお待ち受けの2007年から、当時の竹内博明組長(行圓寺)、藤原憲副組長(法山寺)と第2組の役員の皆さんが総力を挙げて10年ぶりに開催の推進員養成講座がきっかけで、その修了者を中心に、往年の第1期の皆さんと共に、この阿倍野区の即應寺で産声を上げました。さらに、第3期、第4期の皆さんを迎えて以来、12年が経過して小学校を卒業する年になりました。会員の皆さんには、どれだけ自身を親鸞聖人の教えに深めることができたでしょうか。目的はただ一つ、お仲間と共に手を携えて、二河白道の譬えの白道をひたすら歩むことでした。

それには発足前から、道先不安な私たちを、手取り、足取りして付き添い、共に歩んでくださったのが、藤井善隆住職(当時)でした。

今回、その思いを新たにしてい、推進員誕生の初心に戻り思い出の即應寺をお借りして総会を開催し、その藤井善隆前住職のお話を伺います。第3期、第4期の皆さんも、ぜひ同窓会を兼ねてご参加ください。

あゆみの会総会案内

日時 **12月13日(日) 13:30**
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 総会(事業報告、会計報告、事業計画案、予算案、役員選出等)、記念法話「真宗門徒の念仏生活」(仮題)

講師 藤井 善隆先生(即應寺前住職)

その他 2021年年会費(2000円)を受け付けます。よろしくお願いします。



2017年4期養成講座



2013年3期養成講座



2008年2期養成講座

不退転のあゆみ

コロナ禍の中で、あゆみ通信を読み直して、結成以来、ほんとはよくここまで、仲間の皆さんと来られたなあと、つくづく実感した。それは、とても一人では12年という年月を、仏法聴聞を続けてはいなかっただろう。

2004年母が亡くなり、母が聞法していた、高校の後輩の即應寺善隆住職に願い通夜と葬儀行った。退職後の第2の仕事も辞めて、法事を勤めながら、高校時代の友人と自分探しの四国88か所遍路を2年間で終わった。

2007年に住職に背中を押されて、養成講座を受けたのが、親鸞聖人の浄土真宗とのかかわりである。後期講習の真宗本廟で、親鸞聖人にお会いして、修了後の座談で、門徒仲間のFさんから「仏弟子の同窓会をしよう」から、あゆみの会が誕生し、こうしてお寺の垣根を越えて多くの仲間が出来て共に白道を歩む。12年が経過し、足腰が弱ってきたが、心は常に南無阿弥陀仏。代えがたい宝物である。(本)

本当の私に会い、その私を受け止めていく

紙上法話

合掌すること

近江5組
乾

正念寺住職
文雄先生



「合掌」は仏教のオリジナルの作法ではないようです。今から2500年ほど前に、今でいうインドにお釈迦様がお生まれになるのですが、その地では当時から挨拶の作法として、人に会うと手を合わせ「ナマステー」という言葉が交わされていました。

②インドの古い考えでは、象徴的に「右」は清浄(清く美しい)を表し、「左」は不浄(汚れている)を表しました。何も右手がきれいで左手がそうではないという意味ではありません。もしも左利きの人がいても気を悪くしないでください。

③また、古代インドの言葉を語源とする英語を見てみると、「右」を表す“right”には「正しい」という言葉があり案ず。そして「左」を表す“left”には「あまり価値がない」という意味も残っています。もう一度言いますが、左利きの人がいても気を悪くしないでください。大事なことは「右がよくて左がよくない」ということではありません。そうではなくて「私たちには清く澄んだ、つまりいい所である清浄な面もあれば、少し汚れているような、もっというと、ずるくて情けなくなるような、恥ずかしくて人には見せられないような不浄の面の両方が、みんなに備わっている」ということなのです。

④そして普段の私たちは自分のいい所を前面に出し、駄目なところはできるだけ隠して人と接しているという



ことがないでしょうか。家族であっても、恋人同士であっても、同僚やご近所であっても、大事な出会いになればなるほどいい人を演じ、見られたくないような所はひたすらごまかして生きるということがないでしょうか。そして、自分を演じることに、また、人とかかわることにつかれていたりしませんか。

⑤「合掌」は「私の中にあるいい所もダメなところもすべてを一つにして、素の私、そのままの私になって、目の前にいるあなたに出会っていきます」という意味なのです。だから、「合掌」と言われて素直に手を合わさらない人は、無意識のうちにその行為に込められた意味に気づいているのかもしれない。



⑥「ナマステー」という挨拶は今でも続く生きた挨拶です。分かりやすくその意味をたずねると、「ナマス」は「尊敬する」という意味で、「テー」は「あなたを、あなたに対して」という意味になります。ですから「私はあなたを大事な存在として頭を下げて出会っていきます」という意味になります。そして「合掌」することで「私は見栄を張ることも、いい格好をすることも、自分をごまかすこともせず、大事なあなたに頭を下げて、きちんと出会っていく準備が整いました」という意味になるのでしょうか。

⑦「合掌」にはこのような意味があるからこそ、大事な作法として今に受け継がれてい

るのです。そして「合掌」で始まる法要や仏事は「いい人になる」ための時間でも、「亡き人に祈りを捧げる」場でもなく、「ありのままの本当の私に出会い、その私を受け止めていく」という大事な学びの場なのです。 終わり

親鸞のことば 心の善し悪しを問わない、念仏の教え

わがころよければ往生すべしとおもうべからず。自力の御はからいにては、真実の報土へうまるべからざるなり。

(「親鸞聖人血脈文集」)



人に親切にすることは好ましいことです。しかし親切にした時、「自分もまんざらではない」と思い

上がったたり、「私にも親切にしてほしい」と要求する気持ちが起こってしまうものです。人間の行いにはどうしてもそのような毒(煩惱)が混じっている、そう親鸞は言っています。ですから「わがころがよい」ということはなく、「わがころは悪い」のです。しかしまた親鸞は「わがころが悪いから往生できないと思ってはならない」とも言います。往生に心の善し悪しは無関係であるとされ、阿弥陀様が与えてくださった念仏によって往生するのです。またこの一節の「自力のはからいでは真実の浄土に生まれることができない」とは、自力のはからいで生まれるのは仮の浄土であり、そこにおいて自力の人々は阿弥陀様によって真実の浄土に生まれるものに育てられていくのだということです。阿弥陀様の「人々を決して見捨てない慈悲の心」に触れて救われたからの言葉です。

(真宗大谷派名古屋別院「人を照らす親鸞の言葉」から)